

N1 à N2 における à の機能と意味構造  
-N1 avec N2 との対比を通して

梶原久梨子 (大阪大学 kajiwara.kuriko.celas@osaka-u.ac.jp)

## 1. はじめに<sup>1</sup>

- ・ フランス語の<N1 à N2>と<N1 avec N2>は、しばしば非置換的であり、意味解釈や使用文脈に差異をもたらすことがある。J'ai rencontré une jeune fille (au + \*avec un) sourire accueillant. / J'ai été accueilli par la jeune fille (??au + avec un) sourire éclatant. (Cadiot 1991)
- ・ 本発表の目的  
<N1 à N2>と<N1 avec N2>の違いを明らかにすること。  
avec と競合する<N1 à N2>で、à は意味構築にどのように寄与しているかを明らかにすること。
- ・ 本発表の流れ  
両構文の相違をめぐる先行研究を概観 (2 節)  
N1 と N2 の特性に着目し、外発的特徴型・内発的特徴型・一時的特徴型の三種類に分類 (3 節)  
<N1 à N2> が識別的に、<N1 avec N2> が説明的に現用いられることを示す (4 節)  
飽和名詞／非飽和名詞の観点から<N1 à N2>と<N1 avec N2>における à と avec の機能を検討  
à が特定の意味を持たず、定位作用のみを担うという特徴に由来する (5 節)。

## 2. 先行研究の紹介と本稿の目的

- ・ Anscombe (1990, 1991)  
<N1 à N2> : N1 の恒常的・本質的特徴 (caractéristique essentielle) を導入。  
<N1 avec N2> : 一時的・偶発的特徴 (caractéristique accidentelle) を付加<sup>2</sup>。
- ・ Cadiot (1991, 1993)  
<N1 à N2> : à は N2 の指示性を弱めつつ N1 に統合し、N1 の下位タイプを作る。  
属性提示、指示弱化、カテゴリー化、命名。  
<N1 avec N2> N1 と N2 を「自立した二項」として提示し、N2 が独立した指示対象として保持。
- ・ Schapira (2005)  
分析対象かを測る基準として avoir テストを提案。  
N1 a (possède/contient) N2 が成立するか (un jouet à piles → Le jouet a des piles) <sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 本稿は梶原 (2025) の一部を加筆修正し、発展させたものである。

<sup>2</sup> Anscombe (1991) は、caractéristique accidentelle と caractéristique accidentelle をそれぞれ次のように定義する。

De ce point de vue, la propriété accidentelle est du côté des procès. Elle est de nature temporelle, i.e. est située dans le temps. Elle est susceptible d'avoir une fin et un début extrinsèques, même si elle n'en possède pas intrinsèquement parlant. La propriété essentielle, à l'inverse, transcende le temps : elle n'est pas de nature temporelle. La propriété essentielle est une vraie propriété, alors que l'accidentelle est un procès, en fait un état. (Anscombe 1991)

<sup>3</sup> Schapira (2005) は、moulin a du vent が成立しないため moulin à vent を avec と競合する<N1 à N2>とみなさないが、jouet à piles と同じ意味構造を持つと考えるため、本発表では avec と競合する<N1 à N2>として扱う。

Anscombre (1990, 1991) に反論 : à は本質的特徴を表すわけではない (??l'homme aux yeux)。

<N1 à N2> : 「一つの全体 (tout)」の形成。N2 が N1 に組み込まれ統合される。

- ・ <N1 à N2> と <N1 avec N2> の違いに関する見解は統一的ではない。  
なぜ à が avec や avoir と同じような機能を果たすことができるのかは明らかではない。
- ・ 本発表における 2 つの問い
  1. <N1 à N2> と <N1 avec N2> はいかなる意味構造上の差異をもつのか。
  2. なぜ à が、avoir や avec と競合し得るのか。 <N1 avec N2> と競合する <N1 à N2> において à はどのような機能を担い、どのように意味解釈の形成に寄与するのか。

### 3. N1 à N2 の分類

- ・ 分類するための 2 つの問い
    - ① N2 が N1 の「恒常的な特徴」か「偶発的な特徴」か？
    - ② N2 に形容詞を付けずに成立するか？
- (例 : ?? garçon aux yeux / garçon aux yeux bleus, ??maison au toit / maison au toit rouge)
- 【外発的特徴型】(料理名・動力・柄／模様・付属品など)
  - 【内発的特徴型】(構成要素・身体的／生得的特徴など)
  - 【一時的特徴型】(物の状態・表情・持ち物・身につけているものなど)

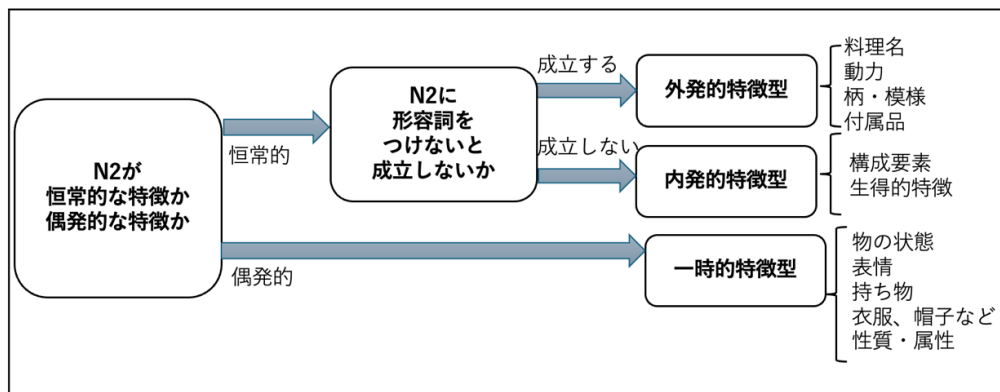


図 1. <N1 avec N2> と競合する <N1 à N2> の分類

### 4. N1 à N2 と N1 avec N2

#### 4.1. 外発的特徴型 N1 à N2

- ・ 料理名 : tarte aux pommes, steak au poivre, café au lait, glace à la vanille, canard aux petits pois
- 動力 : moulin à vent, moteur à essence, four à micro-ondes, jouet à piles, stylo à bille, instrument à cordes
- 柄・模様 : robe à fleurs, chemise à rayures, tissu à pois, mouchoir à carreaux
- 付属物 : maison à terrasse, vélo à roulettes, robe à volants, bague au diamant, sac à bandoulière

- ・ N1 に本来的に備わる構成要素ではない N2 が付与されることで、N1 の種類や型が確立される。  
=N1 の下位カテゴリーが形成される。
  - ・ N1 と N2 は語彙的に強く結びつき、原則 *avec* と置き換えることができない。  
*à* が N1 と N2 を結びつけ、「N2 という特徴を備えたカテゴリー」として固定化するため。
  - ・ N2 が N1 に偶然付与された属性ではなく、カテゴリーを規定する要素として解釈される。
  - ・ 付属物は *avec* と置換可能 (cf. *maison avec une terrasse*, *sac avec une bandoulière*) なことが多い。  
N2 が N1 のフレーム内にあるとも考えられるものは内発的特徴型的であるため。
- 例：家とテラス、バッグと肩紐

#### 4.2. 内発的特徴型 N1 à N2

- ・ N2 が N1 に本来的に備わる構成要素。  
具体的性質を明示することで他の N1 の集合から差異化される。
  - ・ N2 に色・長さや大きさ・形状・数といった形容詞を与えなければ成立しない。
- 例：maison au toit rouge, pull aux manches longues, garçons aux yeux bleus, chat à la queue longue
- ・ *à* と *avec* の交替可能性は一律ではない。

N1 が無生物名詞の例

- (1) a. blouse à manches longues  
b. ?blouse avec des manches longues  
c. blouse à manches kimono  
d. blouse avec des manches kimono
- (2) a. voiture à quatre portes  
b. ?voiture avec quatre portes
- (3) a. ordinateur à écran large  
b. ordinateur avec un écran large

- ・ 内発的特徴型で *à* / *avec* の選択を左右する要因  
語彙的要因：N2 が N1 の構成要素として標準的範列に属するか。→(1), (2)  
語用的要因：文脈で N2 が識別手がかりとして働くか、説明的属性として提示されるか。→(3)

- ・ 語彙的要因によって説明される例

ブラウスの袖：manches longues は一般的な袖型＝「ブラウスの袖」という範列に含まれる。

→blouse à manches longues を既に確立したカテゴリーの一つとして理解。

manches kimono は「着物風の袖がついているブラウス」と説明的に解釈される余地があり、付加的な *avec* も現れる。

車のドア：4 ドアは車の性質として一般的なもので?voiture avec quatre portes は不自然に感じられる。

→「N2 で示される構成要素が N1 の特徴として自然と見なされるか」が置換の可否に影響する。

- ・語用的要因によって説明される例

パソコンの例：「大画面パソコン」か、「大きい画面のパソコン」という説明的・付加的要素か。

(4) (電機屋で探しているものを聞かれ)

a. Je cherchais *un ordinateur à l'écran large*.

b. Vous savez, je veux *un ordinateur avec un écran large* ...

(5) a. Il paraît qu'il y a des maisons à vendre dans ce quartier. Laquelle choisirais-tu ?

Je choisirais *la maison au toit rouge et au grand jardin*.

b. Dans quel genre de maison aimerais-tu vivre à l'avenir ?

J'aimerais bien *une maison avec un toit rouge et avec un grand jardin*.

(5)a. : N2 は具体的な何軒かの家の中から話者が選んだ家の特徴を示す手がかり＝識別的要素。

(5)b. : 将来住みたいのは「赤い屋根と大きな庭がある家」と説明的に提示。

- ・ N2 が N1 の範列内にあるか否かという語彙的要因も、「識別的か説明的か」に帰着。
- ・説明的に N2 を導入する動機が生じにくい（「袖が長いブラウス」「ドアが 4 つある車」）。

N1 が有生物名詞の例

- ・ N2 が別の N2 に替わることが想定しにくいいため、<N1 à N2>が用いられることが多い。
- ・ただし、生得的特徴であっても、髪や口髭のように、存在そのもの、あるいは色・形・長さなどが変化しうる属性の場合、文脈によっては<N1 avec N2>が許容される。
- ・ à / avec は N2 が N1 を他の個体から識別するための手がかりか、N1 の説明的特徴かが基準。

(6) Qui est le nouveau professeur de littérature ?

C'est un homme (aux/avec des) cheveux longs et (aux/avec des) yeux clairs. (梶原 2025)

à が好ましい	3
avec が好ましい	0
どちらでも構わない（意味・文脈の違いを感じない）	0
どちらでも構わない（意味・文脈が異なる）	0

表 1. (6)のインフォーマント回答<sup>4</sup>

(7) Tu vois cet homme là-bas ?

L'homme (aux/avec des) cheveux longs ? (梶原 2025)

à が好ましい	1
avec が好ましい	1
どちらでも構わない（意味・文脈の違いを感じない）	0
どちらでも構わない（意味・文脈が異なる）	1

表 2. (7)のインフォーマント回答

<sup>4</sup> 三名のインフォーマントにどちらが適切であるか尋ねた。内二名は、口語ではどちらを使っても不自然ではないと断った上で回答した。

(6): 「新しい文学の先生」を特定するための手がかりとして髪の色や目の色が示される。

(7): インフォーマント A (à) 「警察の事情聴取など、客観的に身体のパーツを描写する時には *avec* を使うが、(7)では他に人がいる中から「髪の長い男」を指示するため *à* が適切。」

インフォーマント B (*avec*) 「発話時点で指示対象がすでに共有されており、髪の色が「特定の人物の追加的な情報」として際立ち、N1 から切り離され、髪に目がいく。」

インフォーマント C (文脈が異なる) 「*à* は髪の毛を含めた人物全体をまとまりとして捉え、*avec* は髪の毛だけに注意が向く」。「*à* は『あのコート素敵ね』など髪と関係のない話が、*avec* は『あんな髪型にしたいわ』など髪に関連した話が続くように感じる。」

→話題に上がった男を同定する場合は髪を識別要素とし *à* が用いられ、すでに同定できていて、追加で特徴を述べる場合はその特徴を *avec* で説明する。

回答が割れたのは、人物と髪のどちらに焦点を当てるかの解釈が回答者によって異なるため。

- ・話者が持つイメージとの対比を意図するため、通常 *à* が選ばれる目の色に *avec* が用いられる例

(8) Tu sais, Anita est très gentille, je suis sûr que tu l'aimerais bien, c'est une femme avec des cheveux blonds et des yeux bleus, personne ne veut croire que c'est une gitane.

(J.M.G. Le Clézio, *Le Désert*)

N2 はジプシーのステレオタイプとの対比を示す説明的特徴として提示される。

- ・内発的特徴型における *à* / *avec* の選択は、語彙的要因と語用的要因が影響する。
- ・両者は独立した要因ではなく、いずれも「N2 が識別的か説明的か」に収束する。
- ・語彙的に N1 の構成要素として範列内にある属性は、N1 内での差異化が焦点になるため説明的機能を持ちにくく、<N1 à N2>が好まれやすい。
- ・範列外の属性や非標準的な仕様は、説明的な情報として<N1 avec N2>で表される。
- ・語彙的に範列内の属性であっても、背景知識との対比、理想像や思い描くものの描写、人物像の補足説明などの目的で提示される場合は、N2 が説明的な役割を担い、<N1 avec N2>が選択されうる。

#### 4.3. 一時的特徴型 N1 à N2

- ・本来は *avec* で表されやすいとされる偶発的・可変的な特徴が、*à* を用いて導入される。
- ・N2 は N1 の状態・表情・服装・持ち物などを表す。
- ・N1 と N2 の性質によって *à* が認められるか否かは異なる。

##### 4.3.1. 物の状態

インフォーマント三名は、全員が(9)では *à* を、(10)では *avec* を選ぶと回答<sup>5</sup>。

(9) A: Paul est déjà là. J'ai trouvé sa voiture.

B: Laquelle ?

A: C'est la voiture aux vitres ouvertes.

複数の車から一台を識別する手がかりとして N2 を提示。

<sup>5</sup> 内一名は口語ではどちらでも不自然ではないとした上で回答した。

(10) A: La voiture que vous avez vue, elle était comment ?

B: C'était *une voiture avec les vitres ouvertes*. J'ai aperçu deux hommes à l'intérieur du véhicule.

「窓が開いていた」は、目撃した車の描写として説明的に導入される。

→N1 を識別する文脈であれば *à* が、状態の叙述・説明が目的となる文脈であれば *avec* が選ばれる。

#### 4.3.2. 表情

- ・無修飾で表情が表されるのは不自然。

(11) a. ??Une fille au sourire

b. Une fille au sourire radieux

- ・笑顔に一定の性質が付与されることで、人物の特徴として統合される。
- ・任天堂のゲーム『ファミコン探偵倶楽部笑み男』 *Emio L'homme au sourire*  
「笑み男」は常に笑顔の紙袋を被っており、笑顔が恒常的な状態。

- ・Cadiot (1991) の例

(12) a. J'ai rencontré une jeune fille (au = \*avec un) sourire accueillant.

b. J'ai été accueilli par la jeune fille (?? au + avec un) sourire éclatant.

(12)a.は少女と微笑みを連続的参照枠 (continu référentiel) の中で一体化して示し、(12)b.は人物像から笑顔を切り離し、「その時の表情」を付加情報として自律化して提示する。(Cadiot1991)  
*à* が識別的特徴、*avec* が説明的という本発表の指摘と一致。

(13) a. J'ai croisé *une fille avec un sourire radieux* devant la bibliothèque.

b. Tous les vendredis, je croise *la fille au sourire radieux* devant la bibliothèque.

(13)a. : 三名のインフォーマントは全員が *avec* の方が自然であると回答。

瞬間的に目に入った笑顔は、人物像を識別する特徴として理解されるよりも、その場限りの説明的な情報として理解されやすいため<sup>6</sup>。

(13)b. : 三名のインフォーマントは全員が *à* が自然であると回答。

人物と安定的に結びつき、*sourire radieux* が *fille* を識別する特徴として解釈されるため。

笑顔が「出来事とともに生じた一時的な振る舞い」として述べられる場合には *avec* が選ばれるが、「人物像に組み込まれる特徴」として提示される場合には *à* が用いられる。

- ・*fille au sourire* のような無修飾形は成立しないのは、笑顔を人物の識別的要素として解釈するためには、「どのような笑顔であるか」という情報が必要であるため。

#### 4.3.3. 持ち物

- ・<N1 *à* N2>の形は一般的には用いられず、<N1 *avec* N2>が用いられる。

(14) a. ??femme *à* l'éventail

b. femme *avec* un éventail

<sup>6</sup> ただし、インフォーマントの一人は、瞬間的な出会いであっても笑顔が「その人物を想起する際の特徴」として心に残る場合には、*au sourire radieux* も容認できると答えた。

- ・ N2 が動物の場合も、「猫を連れている／飼っている女性」とは解釈されない。

(15) a. ??femme au chat

b. femme avec un chat

- ・ 芸術作品のタイトルでは、<N1 à N2>型の表現は広く見られる。

例：« La Femme à l'éventail » (ルノワールやモディリアーニなど)

« La Femme au Chat » (ボナール、クールベ、ルノワールなど)

- ・ 小田 (2015)：絵画における<N1 avec N2>型と<N1 à N2>型のタイトルに関する考察

« La Dame à la licorne » の例を挙げ、「X と Y の結びつきが必然的かつ緊密である」。

一角獣は純潔や処女性の象徴であり、聖ユスティナのアトリビュートとしてもよく知られる。

« La Dame à la licorne »は、単なる「貴婦人と一角獣」ではなく、N1 の本質的特徴を N2 が示すために<N1 à N2>型が選択される。

- ・ 小田 (2015) の指摘は、N2 は N1 を識別する要素である場合に à が選択されることを裏付ける。

#### 4.3.4. 身につけているもの

- ・ 服・帽子・眼鏡などは、人物像の外観を構成する要素として機能するため、持ち物よりも人物像と結びつきやすく、à が許容されやすい。
- ・ 新情報の導入では avec、既知情報の再登場では à が用いられると指摘。

(16) Sur le trottoir d'en face, un homme suivait des yeux *une jeune fille avec un chapeau rouge*. [...] *La jeune fille au chapeau rouge* entra dans un magasin. (Schapira 2005)

- ・ 初出であれば説明的に解釈され、既出であれば識別的に解釈される。
- ・ 作品タイトルでは、N2 が人物像を特徴づける手がかりとして読み取られる。
- ・ 象徴的特徴型 N1 à N2

識別的解释が強くなると、N2 が人物像を象徴する特徴として読み取られることがある。

C'est N1 à N2 のコピュラ文が自然に成立するかどうかによって見分けられる。

例：« La dame aux camélias » C'est *la dame aux camélias*. / ?? C'est *une femme au chapeau noir*

#### 4.3.5. 属性

- ・ N1 と N2 の関係が語彙的には一時的であるが、N2 が N1 の恒常的性質・属性として理解される。
- ・ 固定化され、イディオムの的に用いられる。

例：homme à femmes, homme à problèmes, femme à chats

C'est un homme à femmes.

- ・ à N2 は中立的な情報提示ではなく、性質・傾向といった N1 のあり方を特徴づける属性的要素。
- ・ 「N2 を伴っている／持っている N1」ではなく、N2 を N1 の属性として示す。

例：femme à chats 「複数の猫」からステレオタイプ的に連想される属性を表す。

homme à femmes 「複数の女性と一緒にいる男」→「女性関係が派手」という一般化された性質。

- ・ 一時的特徴が、N1 を象徴するほどの密接に関わる要素として表され、属性として解釈される。
- à N2 は、その人物のあり方を示す抽象的な要素に昇華される。

#### 4.4. N1 à N2 と N1 avec N2 の差異

- ・4 節のまとめ：N1 と N2 の結びつきが識別的に機能するか説明的に機能するか。

【外発的特徴型】à は N1 の種類を規定することに貢献し、N1 と N2 は語彙レベルで強く結びつき、カテゴリーを形成する<sup>7</sup>。

【内発的特徴型】語彙的要因と語用的要因によって前置詞が決まる。N2 が規範的特徴として認識されれば à が優勢。規格外的・説明的な要素であれば avec が用いられる。

【一時的特徴型】avec と結びつきやすい偶発的要素でも、文脈によって N1 を同定、象徴する安定的な N2 であれば、à が選択される。

- ・「恒常的か偶発的か」(Anscombre 1991)、「N2 が自立しているか否か」(Cadiot 1991)、「à は一つのまとまりを形成する」(Schapira 2005) は、互いに矛盾しない。「識別的か説明的か」により包括的に理解することができる。
- ・à が N2 を N1 の属性として安定化させ、人物像やカテゴリーの識別に寄与するのに対し、avec は状況の説明として N2 を付加するという点で、両形式の機能差を説明できる。

#### 5. à の識別性と avec の説明性はどこから生じるのか

##### 5.1. 飽和名詞と非飽和名詞

- ・非飽和名詞：『X の』というパラメータが決まらないかぎり外延を確定できず、意味的に充足していない名詞」(西山 2003)。例：本場・主役・優勝者・前提など
- ・「名詞が文脈に応じて飽和／非飽和を切り替えることは考えにくい」西山(2003)が、実際には一定の変動がある(氏家・田中 2021)。

(17) a. この会社は、山田氏が社長だ。

b. この部屋に、社長が 3 人います。(氏家・田中 2021)

(17)a. は非飽和用法、b. は飽和用法

→位置付けが不明瞭であれば非飽和的に、位置付けが明確であれば飽和的に解釈される。

- ・<N1 à N2> (識別的)：非飽和的な N1 に N2 という特徴を付与して飽和化。

<N1 avec N2> (説明的)：元々飽和的である N1 に説明を加える。

【外発的特徴型】N2 がなければどのような特徴を持つ N1 であるかが理解されず、下位カテゴリーを形成するには不十分。N1 単独では非飽和的なので、N2 によって外延を確定する。

【内発的特徴型】N1 に内在する要素を形容詞で特徴づけ、N1 の集合から当該の N1 を特定。

(18) a. Il paraît qu'il y a des maisons à vendre dans ce quartier. Laquelle choisirais-tu ?

— Je choisirais la maison au toit rouge et au grand jardin.

b. Dans quel genre de maison aimerais-tu vivre à l'avenir ?

— J'aimerais bien une maison avec un toit rouge et avec un grand jardin. (= (5))

(18)a. : 「(売りに出ている家の中で) どの家を選ぶか」に対する答えとして、la maison は不十分 (=非飽和的)。赤い屋根で大きな庭があるという特徴が付与され飽和化する。

<sup>7</sup> Cadiot (1991) も、「à N2 は N1 の下位タイプを構成するのに寄与する」と指摘する。



(18)b. : une maison は「住居としての建築物」という語彙的に安定した外延をもつ。共有された指示対象に「赤い屋根」「大きな庭」という説明を加える。

(19) Qui est le nouveau professeur de littérature ?

C'est un homme aux cheveux longs et aux yeux clairs. (=6))

(20) Tu vois cet homme là-bas ?

L'homme avec les cheveux longs ? (=7))

(19) : 非飽和的な un homme に、髪の色と目の色の情報を与えて飽和化させる。

(20) : 長髪が男を識別する要素として捉えられれば à が、男を視界に入れた上で長髪の男かと問うているなら avec という違いも、非飽和と飽和に還元できる。

【一時的特徴型】表情や持ち物は N1 の外延確定には寄与しにくいいため avec が多い。衣服などは人物を同定する要素となりうるため à が用いられることもある。作品タイトルは、複数の作品群の中で「どれか」や、描かれたのが「誰か」を特定する要素として N2 を付与し、N1 を飽和化する。

・Cadiot (1991) 「à が N1 と N2 を連続的に捉え、avec が N1 と N2 を切り離して捉える」は、単体では非飽和的な N1 に、N2 を与えることで意味が充足し飽和的に理解されるため「連続的」。

## 5.2. à の定位機能

<N1 a/possède/contient N2>が成立する<N1 à / avec N2>の二つのタイプ

①N1 単体では、どの N1 を指すかを理解するには不十分で、同定する要素 N2 を必要とするタイプ :  
à によって導入される N2 は N1 の外延を確定する機能を担い、結果として識別的な効果が生じる。

②N1 単体で外延が確定している、あるいはどれを指すかが問題にならないタイプ :

N2 は N1 に付加される特徴として説明的に扱われ、avec によって導入される。

→なぜ非飽和的な N1 に対して à が選択され、飽和的な N1 に対して avec が選ばれるのか？

・前置詞 à の基本的な機能 X à Y : X (N1) を基準点 Y (N2) に「位置付ける」

例 : Je suis à Osaka. J'habite à Paris. 主体を地理的空間の一点に定位。

・定位操作は空間に固有ではなく、一般化された認知的操作。à は X を Y によって相対的に定める。

・N1 à N2 : N1 単体ではどの N1 を指すのかを決める基準点が欠けている。à は、N2 を基準点として N1 を定め、外延を確定させることに寄与する。

・<N1 à N2>の識別効果は à が本来持つ意味や機能ではなく、定位操作の帰結として生じる。

・X を Y によって相対化するという定位操作は à に固有のものではない。

例 : la voiture de Paul は、車という指示対象を Paul との所有関係において位置付ける。

・しかし à 以外の前置詞は定位に加え、固有の語彙的關係を同時に導入するので、Y は各前置詞が持つ意味によって規定される關係の枠組みの中で解釈される。

例 : de は起源・部分・所有、pour は目的、avec は随伴など

- ・à は「無色透明」(Cadiot 1991 など)と言われるように、特定の語彙的意味を持たないため、à によって導入される Y (N2) は基準点として示されるだけ。
- ・avec で導入される N2 は N1 の外延を決定する識別的特徴ではなく、N1 がもつ指示の枠組みに影響を及ぼさない。
- ・発話文脈において N1 が飽和的に扱われる文脈では、N2 を導入する目的は識別ではなく、N1 の特徴を補足的に述べること。その場合、本来的に随伴的な意味を持つ avec が自然に選択される。

## 6. まとめと今後の展望

- ・〈N1 à N2〉が識別的文脈に、〈N1 avec N2〉が説明的文脈に現れる。
- ・〈N1 à N2〉は非飽和的な N1 に対して N2 を基準として与えることで飽和化を成立させる。
- ・〈N1 avec N2〉は N1 がすでに飽和しているため、N2 は追加情報として記述的に付加される。
- ・à は「無色透明」といわれるように特定の意味を持たず、N1 の基準点を示すことに特化。
- ・今後は、用途を表す〈N1 à N2〉(couteau à beurre, brosse à dents, tasse à café など)を検討するとともに、飽和化と定位作用という枠組みが、名詞句外の多様な à の用法—時間・数量・様態・評価・条件などに、どの程度適用可能であるかを検討する。

### [参考文献]

- Anscombe J.-C. (1990), “Pourquoi un moulin à vent n’est pas un ventilateur”, *Langue Française* 86, 103-125.
- Anscombe J.-C. (1991), “L'article zéro sous préposition”, *Langue Française* 91, 24-39.
- Cadiot, P. (1991), “À la hache ou avec la hache ? Représentation mentale, expérience située et donation du référent”, *Langue française* 91, 7-23.
- Cadiot, P. (1993), “À entre deux noms : vers la composition nominale”, *Lexique* 11, 193-240.
- 梶原久梨子 (2025) 「フランス語前置詞 à に関する発話言語学的研究」, 博士論文, 大阪大学.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 : 指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房.
- 小田涼 (2015) 「絵画のタイトルにおける言葉の結びつきー « La Vierge au perroquet » と « Femme avec un perroquet »」 『フランス語学研究』 49, 1-22.
- Schapira C. (2005) “La formation du tout : à entre-deux noms”, : *Scolia : Sciences Cognitives, Linguistiques et Intelligence Artificielle* 19, Du rapport partie/tout en linguistique de corpus : varia, 93-105.
- 氏家啓吾・田中太一 (2021) 「非飽和名詞から飽和名詞へ、飽和名詞から非飽和名詞へー「類」概念への認知言語学的アプローチー」 日本語文法学会第 22 回大会発表資料.